



Data

監督: ニールス・アルデン・オプレ
ヴ

共同監督: アナス・W・ベアテルセ
ン

脚本: アナス・トマス・イエンセン

原作: ブク・ダムスゴー『IS の人
質 13カ月の拘束、そして生
還』(光文社新書刊)

出演: エスペン・スメド/トビー・
ケベル/アナス・W・ベアテ
ルセン/ソフィー・トルプ

👁️👁️ みどころ

「シリア 消えた10万人」、「アサド政権・反体制派が拉致」、「シリアにおける強制失踪者数(犯行主体別)」が読売新聞に掲載された日の前日に、本作を鑑賞！イスラム過激派組織・イスラム国(IS)による強制失踪者数は8648人とされているから、本作の主人公、ダニエル・リュウはその1人だ。

戦場カメラマンは、その名誉と裏腹に命の危険がある。しかし、ダニエルは「戦火の中の庶民の日常を撮ること」が目標だし、日本の自衛隊と同じように、「戦闘地域」には入らない方針だったから安心安全！いやいや・・・？

ISが当初要求した身代金は70万ドル。ダニエルクラスの人質ならその程度だが、25万ドルに値切ると、今度は200万ユーロに！デンマーク政府はどうするの？家族はどうやって準備するの？北朝鮮による拉致問題と対比しながら、多くの論点を整理したい。

ダニエルの生還は、ある意味で奇跡。しかして、彼は第2の人生をどう生きるの？200万ユーロの返済とともに、私はそれに注目したが・・・。

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

■□■主人公はどんな写真家に？華麗なる転身だが大丈夫？■□■

“戦場カメラマン(報道写真家、戦争写真家)”をテーマにした名作は多い。危険を顧みず戦場のリアルさと生の一瞬をレンズで切り取る戦場カメラマンの仕事は素晴らしいし、その社会的役割は高く評価されている。しかし、それは常に生死の危険と紙一重だ。そんな名作が『おやすみなさいを言いたくて』(13年)、『シネマ35』220頁)や『プライベート・ウォー』(18年)、『シネマ45』未掲載)だった。

それに対して、本作の主人公、ダニエル・リュウは、もともとデンマークの代表選手に選ばれたエリート体操選手だったが、ケガのためその道を諦め、写真家になるために次の

キャリアをスタートさせた若者だ。その場合、普通はカメラ学校に入るものだが、直接お師匠さんを見つけて“弟子入り”する道もある。

本作導入部では、ダニエルが家族と仲良く過ごす姿が描かれるが、そこで目立っている姉のアニタ（ソフィー・トルブ）の意志力と発言力の強さに比べれば、ダニエルはどことなくひ弱く、中途半端。彼が写真を撮っている姿も趣味の延長程度にしか見えないから、これでホントに大丈夫？

■□■戦場に行かないカメラマンに！それは可能なの？■□■

そんな心配をしていると、いきなり恋人のシーネ（サーラ・ヨート・ディトレセン）との同居生活に入ると共に、戦場カメラマンの助手として採用され、ソマリアに行くことに。これには家族もビックリだが、ダニエルは戦場カメラマンになるのではなく、「戦争の中の日常を記録することが自分の目標だ」と説明したから一安心。そのための仕事先はシリアだが、「戦闘地域」にはいかないそうだから、また一安心。しかし、「戦闘地域」とはナニ？逆に「非戦闘地域」とはナニ？この両者の区別、線引きはどうなっているの？

そこで思い出されるのが、小泉純一郎内閣時代に、「重要影響事態法」における「後方地域」の定義の中で示された「非戦闘地域」（の定義）を巡る“一連の議論”だ。そこでは“非戦闘地域”は次のとおり定義された。すなわち、

「現に戦闘行為（国際的な武力紛争の一環として行われる人を殺傷し又は物を破壊する行為をいう。以下同じ。）が行われておらず、かつ、そこで実施される活動の期間を通じて戦闘行為が行われることがないと認められる」地域

しかし、私に言わせれば、これは“神学論争”に他ならない。2004年11月の国会の「党首討論」において、「非戦闘地域がどこなのか1カ所でも言って欲しい」と質問された小泉首相が、「どこが“戦闘地域”で、どこが“非戦闘地域”かと聞かれても、私にわかるわけがない」と答えたことについては、“開き直り”として、第156回国会で内閣不信任案の提出にまで至ったことが、私には懐かしく思い出されてくる。

■□■しかし現実には！どんな実話？どんな原作？■□■

ダニエルが到着したのは、シリアとトルコの国境の町・アザズ。ダニエルがそこで撮影するについては、通訳を兼ねて雇ったガイドはもちろん、自由シリア軍の許可証など、安全のために必要なものを完備していた。しかし、地震や津波がいつ来るかわからないのと同じように、IS（イスラム国）の活動が激化していった2013年当時のシリアでは、“戦闘地域”だけではなく、トルコとの国境地域においても、いつ何が起こるかわからなかったのは仕方ない。そのため、まだろくな撮影もしていないのに「CIAのスパイだ」と疑われたダニエルはガイドから切り離され、目隠し状態で戦闘地域のアレppoに移送されることに。これは、アザズのまちの支配勢力が、それまでの自由シリア軍から新興勢力のISに変わったためらしい。なるほど、なるほど。それはそれでわからなくもないが、シリアとトルコの国境に乗り込んでいったダニエルの危機意識の欠如は如何なもの？

本作は、「ISの人質となった若き写真家と、救出のために奔走した家族の感動の実話！」とされているが、その原作になったのは、ブク・ダムスゴーの『ISの人質 13カ月の拘束、そして生還』（16年）。そして、同作の「13カ月」とは、正確には、邦題の「生還までの398日」とは、2013年5月から2014年6月までのことだから、まずそれをしっかり押さえておきたい。

他方、ブク・ダムスゴーはDBC(デンマーク放送協会)で、中東情勢を取材してきたジャーナリストだから、資料映像もたくさん保有していた。しかし、『ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女』（09年）（『シネマ24』182頁）で一躍世界で有名になったニールス・アルデン・オブレウ監督は、本作を監督するについて、それをほとんど用いていないらしい。つまり、彼はシリアの隣国・ヨルダンに緻密に現場を再現したセットを背景にして、俳優たちの高い演技の力量によってダニエルを取り巻く人間ドラマの再構成を狙ったわけだ。それは、現実を劇として演じて見せ、ドラマとして昇華させることで、人間は受け止めきれない現実を消化させるため、だが、さてその成否は？

■ 2011年3月以降のシリアの強制失踪者数は10万人 ■

本作を鑑賞した翌日の2月24日付読売新聞で、私は「シリア消えた10万人」、「アサド政権・反体制派が拉致」の見出しを発見した。そこには、「シリアでは11年3月から20年8月までに9万9479人が拉致され、強制失踪の状態にある。8割はアサド政権による拉致が占めており、反体制の芽を摘み取る狙いとみられる。残る2割はイスラム過激派組織「イスラム国」など四つの反体制派によるもので、身代金目的も少なくない」と書かれていた。また、下記の表が掲載されていた。

シリアにおける強制失踪者数(2011年3月以降)	
8万4371人	アサド政権
8648人	イスラム過激派組織「イスラム国」
2397人	反体制派組織「自由シリア軍」
2056人	クルド人主体の民兵組織「シリア民主軍」
2007人	国際テロ組織アル・カーイダ系「シャーム解放機構」

この記事は主として現在のアサド政権によるイランに住む民間人の消息不明を問題としたものだが、本作のダニエルのケースは、“イスラム過激派組織「イスラム国」”による拉致被害者8648人の1人に当たることになる。これを見れば、自分が行くシリアとトルコの国境は“戦

闘地域”ではないから安全、というダニエルの考えがいかに甘かったかがよくわかる。2013年当時もそんな危険があったことは当然わかっていたはずだ。

そう考えると、外国人写真家がアザズに乗り込んでいくことがどれだけ危険かについて、ダニエルは自己責任として十分認識しておくべきだったのでは？本作を観ている限り、私にはダニエルのそんな自覚のなさ、不十分さが目につくが・・・。

■□■人質解放の要求額は？政府の対応は？家族の対応は？■□■

本作で私が最後まで分からないのは、IS はダニエルを CIA のスパイだと誤解したから拉致したの？それとも最初から身代金要求の人質として拉致したの？ということ。ダニエルが拉致されるシークエンスを観ていると前者のようにも見えるが、パスポートなどを調べればダニエルの正体はすぐにはわかるはずだから、真相は後者？

他方、ダニエルの身に異変が起きたことは、彼が予定の便で帰国しなかったためすぐに明らかに。そのため、彼が置いていった連絡先に電話をかけると、それは人質救出の専門家・アートゥア（アナス・W・ベアテルセン）だった。ただちに、このアートゥアがダニエルの捜索に向けて動く姿は興味深い。そこで浮上してくる第1の論点は、デンマーク政府は人質とされたダニエルの解放に動くのか？ということ。北朝鮮の拉致問題について日本政府は最大限の努力をしているが、さてデンマーク政府は？デンマーク政府の基本方針は「テロリストとは交渉しない」だそうだが、するとデンマーク政府はIS との人質解放交渉を一切せず、家族まかせにしているの？

第2の論点は、人質解放の身代金はHow much？ということ。アートゥアがIS と接触した結果、提示された身代金は70万ドルだったから、さあ、家族はどうするの？本作は以降これを巡ってストーリーが展開していく。そして、そのさらに細かい論点の第1は、身代金を払うの？それとも拒否するの？第2には、払うとすれば、それをどうやって準備するの？ということになってくる。ちなみに、デンマークでは身代金を支払うための募金活動は法的に禁止されているらしいが、それは一体何のため？日本にはそんな法律はないはずだが、デンマークはその点どうなっているの？本作のパンフレットを読んでもそれについて何も解説されていないのが残念だ。

家族は70万ドルの身代金を支払うために家を担保に融資を受けたり、保険を解約したりしたが、準備できたのはやっと25万ドルだけ。「これ以上は無理」と判断した家族は、アートゥアから「減額交渉は侮辱されたと見なされるから危険」とアドバイスされていたにもかかわらず、その金額を提示したが、それは最悪の選択だった。それによって、ダニエルは殺された人質の遺体を前に、天井から吊るされて鞭打たれることに。さらに、それだけでなく、身代金が200万ユーロに引き上げられたから、さあ大変だ。

■□■人質の恐怖は？人質間の会話は？希望と絶望の揺れは？■□■

本作は、ある日突然IS の人質とされたダニエルの視線から、生還までの398日の苦悩（＝希望と絶望の揺れ）を描くもの。その間、一貫してダニエルを支配した感情は“恐怖”だが、それは実に多種多様なものだった。それが本作最大の見ものだから、それをしっかり味わいたい。その中で少し意外なのは、ダニエルに対して容赦ない拷問を加えるIS 兵士以上に、監視役として身近に接している“ビートルズ”と呼ばれていた4人のイギリス人たちへの恐怖。その中でも“ジョン”が最悪だったが、その実態は？

他方、恐怖と絶望状態の中でも“時間”は進んでいくし、日常生活は営まれていく。そ

して、ダニエルは398日間ずっと独房に1人で閉じ込められていたわけではないから、必然的にフランス人の人質やアメリカ人の人質たちとの人的交流も生まれてくる。何が何だかさっぱりわからない状態で拉致され、拷問され、監禁状態に置かれたダニエルの精神状態がクチャクチャになったのは当然だが、アメリカ人ジャーナリストのジェームズ・フォーリー（トビー・ケベル）はダニエルと違い、筋金入りのプロだった。何事にも明るく前向きなジェームズはみんなのために服や薬を要求し、屈辱的なロバの真似を強いられているダニエルには拒否するようアドバイスしていたから、ダニエルは彼からさまざまなことを学ぶことに。ジェームズは、アートゥアが以前から探していたジャーナリストだから、その身代金の額はダニエルとは大違いのはずだが、残念ながら本作ではそれは描かれていない。

また、本作では、射殺されることになったジェームズが口頭で伝える家族への遺言をダニエルが暗記するシーンが登場し、本作ラストはダニエルがそれをジェームズの葬儀に集まった家族や参列者の前で披露するシークエンスで終わる。それはそれとして、映画としてはサマになっているが、私はそれ以上にジェームズの身代金交渉の実態を知りたかったが・・・。

■□■200万ユーロの支払いは？ダニエルの人生の選択は？■□■

本作ラストに向けては、ISが新たに要求してきた200万ユーロの身代金を準備すべく、再度家族が奔走する姿が描かれる。しかし、私に言わせれば、彼らはなぜ最初からこのように動かなかったの？そこでは当然募金活動がメインになるが、マスコミに知られず、しかも法的に違法とならない募金活動とはどのようなもの？

昨年1月に突如発生した新型コロナウイルス禍では、“クラウドファンディング”の手法が、レストラン関係やミニシアター関係などで活用され、それなりの威力を発揮している。ダニエルの家族は、なぜ最初からこのスタイルによる募金活動に乗り出さなかったの？「48時間以内に200万ユーロを払え」という最後通牒の中で、なお50万ユーロも不足していたのでは、目標達成は不可能と思われたが、そこでダニエルの母親・スサネ（クリスティアン・ギェレルプ・コッホ）による“ウルトラC”が威力を発揮するので、本作ではそれに注目！しかし、よく考えてみれば、200万ユーロは約2億8500万円だから、それが若者1人の命と考えれば安いものでは・・・。

私は本作の結末が見えてきた時点で、家族の元に帰ってきたダニエルがその後の人生をどのように選択するのかについて、①につきISへの復讐や他の人質解放のための活動に入る、②元のおり写真家を目指し、危険なところには行かない、③200万ユーロを返済すべく、写真家ではなく実業家を目指す、の3択を考えたが、さて、ダニエルの選択は？

その選択は本作終了後の字幕で示されたが、200万ユーロの返済はどうなったの？また、本作を観ながら私がずっと気になっていたのは、アートゥアへの実費や危険手当、そして報酬のことだが、それはHow much？菅総理の長男が勤務する放送関連会社「東北新社」

による総務省幹部ら12名への再三の“接待”については、その金額が1円単位まで明らかにされている。そんな状況と対比すれば、ダニエルの身代金として集められた200万ユーロがISの懐に入ったとすれば、その返済がどうなったかについても、当然フォローすべきなのでは？

2021（令和3）年2月24日記